



TITLE:

元朝の成立期ころにおける蒙古民族の鋳工業について

AUTHOR(S):

伊藤, 幸一

CITATION:

伊藤, 幸一. 元朝の成立期ころにおける蒙古民族の鋳工業について. 経済論叢 1958, 81(5): 306-319

ISSUE DATE:

1958-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/132615>

RIGHT:

經濟論叢

第八十一卷 第五號

- 無政府主義の抬頭と日本社会党大会
.....岸 本 英 太 郎 1
- 日本におけるメキシコドルの流入とその功罪 (三)
.....小 野 一 一 郎 24
- 元朝の成立期ころにおける蒙古民族の
鋳工業について.....伊 藤 幸 一 38
- マアセツト夫人の古典派経済学.....鎌 田 武 治 52
-

昭和三十三年五月

京 都 大 學 經 濟 學 會

元朝の成立期ころにおける

蒙古民族の鉱工業について

伊 藤 幸 一

一

元朝の成立期ころにおける蒙古民族は、獸肉や獸乳で生を保ち、骨肉相食める残忍極まる野蛮な民族のように考えられている。だから、およそ鉱業も、工業も、非常に縁遠い民族のように思えるかも知れない。

ところが、彼等は、そのような民族ではない。彼等は、鉱業も工業も、早くから行っている。殊に、鉱業においては、彼等の先祖についての伝説中にも、それをうかがわしむるに足るものがある。従って、そのはじめは、古代にさかのぼることができよう。また、工業についても、すでに古代のころから、狩猟

や牧畜による産物によって、彼等に必要なのはほとんどすべてのものを自給したと言われる。だから、早くから、いろいろな手工業も行われていたのに違いない。

しかし、如何に早くから、彼等は鉱工業を行なってきた民族だと言っても、彼等は狩猟や牧畜を主な生業とした民族である。その生活は、単純な狩猟や牧畜に必要なものだけをもった、極めて素樸なものである。従って、彼等が、農耕民族などの場合より、特に、鉱工業を発達させた民族であるかどうか疑問である。げんに、彼等の東南方に住んでいる漢民族は、すでに後漢のころには、紙をつくることを發明して居り、また、絹や鉄器を外都へ売り出している。即ち、漢民族の鉱工業の発達

は、早くからみるべきものがある。だから、蒙古民族の方が、特に、他にさきんでいるとは言えないだろう。

しかるに、この農耕民族より特にすすんではないかと考えられる彼等が、十三世紀に至って、農耕民族をはじめ、多くの他民族を征服し、しかも、短期日にして三洲にもまたがる大元帝国を樹立するに至った。この驚異的な彼等の偉業は、一体、何が故に可能であつたのであろうか。

当時の相次ぐ戦争や遠征には、非常に多くの武器、その他の戦争用具を必要としたに違いない。当時、彼等は、他民族から、非常に多くの諸物資を掠奪したり、また、西域の商人たちを紹介して欲しいものを買った。だが、それでこと足つたのであろうか。恐らく、それだけでは、当時必要な戦争用具の充分なる補給はできなかったに違いない。

では、当時、彼等に必要な諸物資を、如何にして補給したのであろうか。

それは、何と言っても、当時の彼等の生産によらなければならなかつたであらう。当時、彼等は、他民族からいろいろな方法で、多くの諸物資を得たが、それらがいつの場合でも彼等の

必需品ばかりであつたとは云えない。それらの中には、当時、彼等が見たこともないものもあつた。しかし、彼等の誰も彼も本当に欲していたものは、そのような珍物ではなくて、特に珍らしくもない必需品であらう。そして、それらは主として当時の彼等の生産物であらう。だから、それらの補給は、何と云つても彼等の生産によらなければならないだろう。

だが、彼等の生産と言っても、彼等は、狩猟あるいは遊牧の民である。従つて、彼等の生産物と言へば、鳥や獣か、羊馬などの家畜か、それらから得られるものにすぎない。このような当時の彼等の生産物で、当時彼等が必要なるものを得ることができたのであろうかと言ふ疑問が起るかも知れない。

これについて、例えば、ドーンソンは、彼等が、家畜によってほとんどすべての需要をみたしたことを伝え、家畜から、彼等の衣服や繒繻や弓弦や矢鏃などをつくつたことを記している。

だから、当時の彼等の生産物で、彼等に必要なものは、大体得られたことがわかる。

しかし、当時における戦争や遠征などに彼等が必要とした戦争用具などは、尨大な数に及んだに違いない。その尨大な必要

諸物資を補給するのに、家畜などを原材料として行う彼等の生産では、餘りにも貧弱に思える。当時、彼等の家畜は増加したと言われるが、家畜などを原材料として行う彼等の生産だけで、当時、彼等が必要とした龐大な諸物資を、すべて補給しつくせたであろうか。それらを彼等は、どうして補給したのであるうか。恐らく彼等の鉱工業は、発達していたのに違いない。しからば、どのように発達していたのだろうか。また、それが、当時の蒙古民族の発展に、どのような関係をもつてであろうか。

(1) ドーソン「蒙古史」 田中幸一郎訳補、岩波文庫版、上巻、原序。

(2) ドーソン、前掲書、六六頁。

(3) 拙稿「蒙古民族の商業について」(經濟論叢、第九七巻、第二号)参照。

(4) ドーソン「蒙古史」前掲書、六〇頁―六一頁。

(5) ウラヂミルツォフ「蒙古社会制度史」外務省調査部訳、九三頁―九四頁。

二

元朝の成立期ころにおける彼等の鉱工業を知るためには、ま

づ、当時、彼等がもっていた諸物資を見なければならぬ。如何に彼等の生活が簡素なものであると言つても、その種類は少くない。従つて、それらを、整理の都合上、衣料品類・食器具類・家具類・戦争用具類・その他の五つに分けて列挙しよう。

まづ、衣料品類についてみれば、大体、毛皮製品と織物製品の二種類に大別できよう。だが、その多くのものは、家畜その他の動物資源からつくられていることがわかる。その代表は、何と言つても、毛皮でつくられた衣類である。一概に毛皮と言っても、羊や大や仔山羊の毛皮から、狼・狐・海狸・貂鼠・穴熊などの毛皮まである。彼等の衣類は、冬と夏とで違つていた。彼等が冬着たものは、二枚合せた毛皮の間に、真綿や綿や粗手を入れてつくられたものである。そして、それらの衣類は、上からはおるものだけでなく、いろいろな毛皮のズボンもある。また、毛皮だけが当時の彼等の衣類ではない。彼等が夏着たものには、木綿などの衣類、つまり、織物製品があった。これらのいわゆる織物製衣類には、いろいろな色に染めてあるものもある。また、いろいろな装飾の施されているものもある。ところが、面白いことに、着物においては、男女の区別がほとんど

なかつた。⁶⁾強いてその区別をつけるならば、女の着物の方が男の着物より、幾分長い目に感ぜられる程度で、着物の上からは、まづ、男女の区別が認められないと言っても差支えなからう。しかし、女は、頭に帽子や笠をかぶる習慣があつた。この帽子と言うのは、木の皮でつくられた筒形のものに絹をかぶせ、その先に、羽根の束か堅い茎のようなものを突き立て、先端を孔雀の羽根で飾り、根元を宝石などで飾りつけた、非常に手のこんだものもあつたが、比較的簡単にできそうな貂鼠裘の帽子や、また、帽子と言うより等と言つた方が適當な、扁平な形をしたものもあつた。⁸⁾さらに彼等は、靴や靴下ももつていた。¹⁰⁾一概に靴と言っても、その中には短靴もあれば長靴もある。¹¹⁾また、これら以外の衣料品に、帯や幼児用の腹掛や、當時、如何にして用いられたかよくわからないが、いろいろな織物があつた。¹²⁾

次に、食生活に必要な諸製品についてみれば、それらが、動物・木・鉱物など広範にわたる原材料を用いてつくられている割合に、その諸製品はそれほど多種類ではない。これは、彼等が移動性に富んでいるからであらう。移動性に富んだ彼等に

元朝の成立期ころにおける蒙古民族の鉱工業について

とつて、最も重要なものは、何と言つても飲食物を入れる皮袋であらう。一概に皮袋と言っても、その用途や形状によつて、皮桶とか皮鉢、¹³⁾あるいは、靴と名づけた方が適當なものもある。¹⁴⁾皮袋について重要なものに、獸乳酒をつくるとき必要な杓子や、碗などの木製品がある。また、これらのほかに、鉄でつくつた鍋や、食うときに用いられたナイフやフォークのようなものや、貴金屬製の盃などが當時あつた。さらに、ルブルクは、動物の骨でつくつた碗などもあつたことを伝えている。¹⁵⁾

また、住生活に必要な諸製品についてみれば、彼等は定住民ではないから、移動するのに都合よくできたものばかりである。例えば、彼等の家(ゲル)をみても、組立てるにもとりはずすにも、また、持ち運ぶにも、非常に都合よくできている。即ち、その骨組みは、柳条や白樺などの木や、なかには角や骨を以てつくられ、¹⁶⁾その屋根や外側にするおほいには、フェルトや毛皮が用いられ、²⁰⁾それをしばりつけるのに紐や網が用いられているだけの実に簡単なものである。この簡単な彼等の家(ゲル)を運搬するために、大小いろいろな車をもつていた。²²⁾これらのほか、彼等の家具には、火鉢や育児用の乳母車などがあ

られよう。

さらに、戦争用具についてみれば、まづ、あげられるのは、他の民族の場合と同じように、弓矢であろう。しかし、狩猟を生業としたり、狩りを非常に重要な行事とする彼等²⁵⁾にとって、それは、ただに戦争用具たるのみならず、重要な生産用具でもあった。一概に弓矢と言っても、当時の彼等の弓矢には、動物の骨その他でつくった弓矢もあり、金属その他でつくった弓矢もある。弓矢のほかに、彼等は長い槍や短い槍、また、長い刀や短い刀をもって居り、特に城壁破壊用として、撞槌やいろいろな弩砲や、城壁などを登攀するための梯子などももって居り、防身用としては、いろいろな甲冑をもっていた。さらに、これらのほかに、当時、鎧や馬衝や鞍や箭筒などや、また運搬用の車があった。なお、当時、生産用具であつたものか、生産用具以外の日常道具であつたものかよくわからないが、斧や手斧や鋸や鑿などもあった。³⁰⁾

以上のほかに、彼等の重要な飲料とも言うべき獸乳酒や、その他の葡萄酒・テラシナ・密酒などの酒類があり、鼓や馬頭琴³¹⁾などの楽器があり、また、祭祀用の羊骨などでつくられた扇³²⁾

や、入口の両側におかれたフェルト製の人形があつた。さらに、装飾品として使われた絹製の人形や、その他、いろいろな装飾品や奢侈品も当時あつたものと思われる。³⁵⁾

- (1) 『蒙古の秘史』小林高四郎訳註、四七頁。『蒙古黄金史』小林高四郎訳註、二五頁。
- (2) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (Translated from the Latin; by William Woodville Rockhill) p. 71.*
- (3) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (Ibid.) p. 70.*
- (4) 『蒙古の秘史』(前掲書、一七一頁及び一二〇頁)によれば、真黒に染めた衣服や染めない白い衣服のあることがわかる。
- (5) 黒縫事略には、以紺絲金線色以紅紫紺線紋とある。
- (6) ドーソン『蒙古史』前掲書、六〇頁。
- (7) この帽子のことをボムカと言う。(The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (Ibid.) p. 73.)
- (8) 『蒙古の秘史』前掲書、六九頁。
- (9) 黒縫事略には、冬帽而夏笠とある。だから、彼等が夏かぶつたものは笠であつたものと思われる。ドーソン『蒙古

史』前掲書、五九頁。

(10) 『蒙古の秘史』前掲書、六九頁。

(11) *The journey of Willem of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 75.*

(12) コシと云う織物は、恐らく他民族製のもので奢侈品である。(The journey of Willem of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 70, p. 86, etc.

(13) 『蒙古黄金史』前掲書、九六頁—九七頁。『蒙古の秘史』前掲書、四一頁、二〇五頁。

(14) ルブルクは、肉のついた骨などを入れる容器を四角な匏 (a square bag) と云っている。(The journey of Willem of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 65-66.)

(15) 『蒙古黄金史』前掲書、一二三頁。

(16) *The journey of Willem of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 65.*

(17) 『蒙古の秘史』(前掲書、一六九頁)には黄金の盃のことが記され、『蒙古黄金史』(前掲書、一二三頁)には銀の碗のことが記されている。

(18) *The journey of Willem of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 69.*

元朝の成立期ごろにおける蒙古民族の鉄工業について

(19) ウラヂミルツォフ、前掲書、九一頁。

(20) 竹島卓一「建築史上より見た蒙古包」蒙古学、第二冊、一〇九頁以下。

(21) 米内山庸夫「蒙古草原」一一七頁。

(22) 彼等はオノン河・ケルレン河の上流の險阻な地方でさえ用いられる荷車や、平らかなステップで数多くの大きなエルトをのせることだけに用いられる巨大な荷車を持っていた。(ウラヂミルツォフ、前掲書、九二頁)。

(23) 『蒙古の秘史』前掲書、三三頁及び二五四頁。

(24) 『蒙古の秘史』前掲書、九三頁及び二一四頁。

(25) ウラヂミルツォフ、前掲書、八八頁—九一頁。

(26) 黒龍略記に、有頭羊角弓 通長三尺有懸箭 角面連繩即也 有駝骨箭とある。

(27) 鉄などを使った矢だけでなく、銀の鏃のついた矢もあった。(The journey of Willem of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 180.)

(28) 『蒙古の秘史』前掲書、六二頁及び一四一頁。

(29) 黒龍略記に、有柳葉甲有羅圈甲 重六 とあり、また、別の

ところに有鉄団牌以代兕觥とある。また、マルコ・ポーロは、水牛その他の動物の皮でつくったことを伝えている。

(Yule; Marco Polo. Vol. 1.)

(30) 『蒙古の秘史』前掲書、二四三頁。

(6) 拙稿「蒙古民族の社会経済史的考察」(経済論叢、第七五卷、第一号)参照。

(7) 『蒙古の秘史』前掲書、六二頁及び一七〇頁。

(8) 蒙紐備録には、凡占卜吉凶進退殺伐毎用羊骨屑以云々とする。

(9) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 59.*

(10) 当時の彼等の装飾品や奢侈品のほとんどのは他民族から得た。*The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 168.*

三

では、これらの諸製品は、すべて彼等の生産品であろうか。彼等の生産品は、当時、どのようにしてつくられたのであろうか。それは、ものによって、それぞれ事情を異にする。従って、一概に言い難い。だが、それらを、さきの区分に従って考察することができよう。

まず、衣料品類についてみれば、綿や木綿の着物や、絹織物などのいわゆる織物製品のように、その原料が彼等の地でない

ものは、他の民族の製品、つまり、外来品であるが、それら以外のものは、すべて彼等の生産品である。中でも毛皮の着物などは、彼等の代表的な生産品である。これらをつくるのに必要なものは、すべて彼等の家畜から得られる。即ち、彼等の着物や靴下などにする毛皮は、家畜の毛皮であり、毛皮を縫い合せたりするのに必要な絲は、家畜の臍を細くほぐし、それを幾重にも縫って得られる¹⁾。だから、これらをつくるのは、彼等だけで充分である。富んだ貴族乃至は領主たちは、自分の支配下の男たちを使って、まづ、家畜から毛皮をとらせる。そうして得た毛皮を、縫物をさせるための小さい家(ゲル)などに女を集め、そこで着物や靴下などに縫い合わせる仕事をさせる²⁾。また、一般の蒙古人たちは、各戸ごとに、それぞれ自分たちの家畜から、男が毛皮をとり、女がその毛皮を縫い合せて、彼等に必要な着物や靴下などをつくった。なお、彼等の着物や靴下などのほかの衣料品の生産も、着物や靴下などをつくる場合とほぼ同様にしてつくられたものと思われる。

次に、食生活に必要なものについてみれば、黄金の盃や銀の椀などの貴金屬製のものは、外来品であるが、それら以外のは

とんどのものは、彼等の生産品である。しかし、彼等が、それを如何にしてつくったかを伝える資料を見出すことができない。だが、当時、彼等の食生活に必要な諸製品を、彼等が商品としてつくったものとは考えられない。だから、衣料品類をつくる場合と同じように、大体、各戸ごとにそれぞれでつくったものと思われる。

さらに、仕生活に必要な諸製品についてみれば、そのほとんどのものが彼等の生産品である。即ち、彼等の家（ゲル）の骨組たる柳条や白樺や松は、立木を切ってくればそれで足り、屋根や外側の壁として必要なフェルトや毛皮は、いずれも彼等の家畜からつくられる。また、それらをしばりつけたるのに必要な紐や繩は、駱駝の皮や馬のたてがみから得ることができ³⁾。しかし、当時の彼等は、それらを必要以上につくったのはなからう。彼等がつくったのは、直接必要にせまられてつくったのであろう。従って、衣料品類をつくる場合のように、他のものを使ってつく⁴⁾らしたか、各戸ごとにそれぞれでつくったものと思われる。

また、当時の戦争用具や生産用具についてみれば、一部の甲

元朝の成り立ちころにおける蒙古民族の鉱工業について

冑その他の武器は、外来品であるが、⁵⁾ 彼等の生産品も決して少なくない。当時、彼等の生産品が多いのは、彼等が、他民族の進んだ技術などをとり入れた⁶⁾り、進んだ技術をもった他民族を使って、大規模な生産を行うようになったからである。しかし、そのように大規模な生産を行うことができたのは、彼等の支配的な地位にあるものだけで、一般の蒙古人たちは、やはり、彼等の衣料品をつくる場合のように、極めて小規模な、また、相変らずの原始的な方法で、鉄を採って刀などをつくったり、動植物などを原材料として、彼等に必要な弓矢や甲冑などをつくった。

以上のほかのものについてみれば、まづ、当時、彼等が非常に喜んで飲んだ葡萄酒、テラシナ、密酒などの酒や、絹製の人形などのいわゆる奢侈品や装飾品の、ほとんどのものが外来品である。また、彼等の必需品とも言うべき獸乳酒や、祭祀用に使われた大鼓や馬頭琴や羊骨製の扇などは、彼等の生産品である。ことに、獸乳酒は、彼等の誰も彼も生産した酒である。だが、貴族乃至は領主たちは、現物税徴収として出さした家畜から、納税者たちを使って搾乳させ、加工させて得た。また、一

般の蒙古人たちは、各戸ごとに、それぞれ彼等の家畜から搾乳し、加工して得た。

- (1) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 75.*
- (2) こゝでとられる女たちは、女中である。(The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 56.)
- (3) 米内山庸次、前掲書、一一七頁。
- (4) ルブルクの伝えるところによれば、彼等が、中国人たちを使って彼等の家(蒙古包)を組立てさせたとも解釈がある。(The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 177.)
- (5) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) p. 261.*
- (6) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) pp. 137-138.*
- (7) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) pp. 177-178.*
- (8) 五十人もの多くの職工を集めて生産すると言う、当時としては大規模なものもあった。(7と同じ)
- (9) 拙稿「蒙古民族の社会経済史的「考察」前掲書、参照。

四

こう見てくると、当時、彼等がもっていた諸製品の種類は、非常に多いが、それは、当時、外米品が非常に多かったからであるように思える。

では、当時、彼等がもっていた諸製品から、外米品を除外すれば、当時も、同じであろうか。

だが、当時以前の資料が乏しいから、詳細に比較検討することはできない。しかし、十一世紀乃至十三世紀における彼等は、非常に食料が不足し、樹液まで飲んで暮さなければならなかったと言われる。だから、当時以前においては、彼等の剰餘生産はほとんどなかったものと考えられる。従って、加工生産はほとんど発達しなかったであろう。しかし、彼等が生きていくに必要な物資は、いつの場合でもなくてはならない。即ち、彼等は、寒さを防ぐために必要な衣類や、飲みものをに入れるために必要な袋などの皮製品や、最小の生産用具たる弓矢や、その他櫛、住居、車などは、いつの時代でも必要である。げんに、彼等は、既に奴隷のころからそれらをもっていた。だか

ら、当時以前においても、当時におけるほどは諸製品の種類がそろっていないかも知れないが、それに近い諸製品はあったものと考えられる。

しかし、たとえ、当時彼等がもっていた諸製品は、すでに、当時以前において彼等がつくつていたものと言っても、それらのものが、当時以前において、当時つくられたくらいつくられ、また、当時における諸製品の品質をそなえたものがつくられたか、疑問である。

これらについて、かりに今、彼等が家畜からつくった製品を例にとつて、当時以前における場合と、当時における場合とを比べてみれば、当時以前においては、彼等は遊牧民であつても、家畜が足りなくて、狩猟や漁撈もしなければ暮していけなかったと言われる。従つて、当時以前においては、家畜から得られる獸乳酒も、皮袋や衣類なども、それほど多くは得られなかったに違いない。これに對して、当時は、彼等の家畜が増加したと言われる。だから、当時においては、家畜から得られる獸乳酒や、獸乳酒をつくつたりするのに必要な皮袋や、その他家畜から得られる諸製品は、より多くつくることができよう。

元朝の成立期ごろにおける蒙古民族の鉱工業について

従つて、家畜からつくられた諸製品は、当時以前よりも、当時の方が、より多くつくられたことは明らかである。また、こうして彼等の家畜から、より多くの諸製品がつくられるようになった当時において、それほど多くはつくられない当時以前の場合より、つくられる製品がよくなることはあつても、粗悪になるようなことは、まづ、考えられない。つまり、家畜からつくられた諸製品は、当時以前の場合より、当時の方が、より良いものがより多くつくられたものと言つても過言ではあるまい。

このように、当時以前における場合よりも、当時の方が、より良いものがより多くつくられたと言ふことは、当時以前よりも、当時の方が、より手工業の生産力が発達したことである。当時、彼等の生産力の主なものは、家畜から得られるものであるが、ただに、彼等の家畜から得られる生産だけが彼等の生産のすべてではない。当時、家畜資源の生産以外の他のあらゆるものにも生産力の発達を伺うことができる。だから、それは、当時以前よりも、当時の方が、彼等の鉱工業生産が発達したと言ふべきであらう。

彼等の鉱工業生産が発達すれば、彼等のその生産様式にも変

化がみられるに違いない。では、当時に至って、どのように変化したであろうか。

彼等は、すでに古代において、私有財産制のもとにおかれていたと言われる。だが、古代における彼等は、血縁関係によって形成された氏族から、無関係に行動できる状態にあったのではない。やはり、血縁関係の純潔を保つことに努めた氏族共同体の一員として、乏しい生産力に苦しみながら、各戸にわかれて家族経済的な生産を行った。ところが、当時に至っては、古代における氏族共同体は、十二世紀末頃から盛んに行われた相次ぐ結合や分岐によって、血縁関係の純潔は次第に失われ、次第に個人主義的遊牧経済の土壌の上に成長したステップ氏族の族制が形成されていった。従って、彼等は、遊牧地や納税関係などでは、共同体につながりをもっていたが、その他は全く個人主義的な行動をとるようになっていた。だから、次第に貧富の差が大きくなり、貧しいものの中には、やっと自分たちに必要なものが生産できるか、あるいは、必要なものさえ十分に得ることができないものもでてくる。ところが、一方では、富んだ勢いあるものは、自分たちだけで生産するのではなく、多く

のものを使得、次第に大規模な生産を行うものもあらわれる。だが、当時、彼等が使ったものは、蒙古人だけではない。他民族まで使得て生産するものもあつた。このように、当時以前においては、彼等は、みな氏族共同体内の彼等同志で、極めて小規模な生産を行っていたのが、当時に至って、彼等の中に、他民族までやとつて、しかも大規模な生産を行うものもあらわれたと言うのは、彼等の生産様式が、当時に至って如何に変わったかを示している。

(1) ウラヂミルツォフ、前掲書、八七頁。

(2) まづ、彼等の毛皮製品が早くからつくられていたことについては、塩鉄論、力耕篇や、後漢書、鮮卑伝などにうかがわれる。また、獸乳酒についても、前漢書、卷一九、百官公卿表七上や、同、卷二二、礼樂志、第二や、同、卷五四、李広蘇建伝、第二四その他にそれをうかがうことができる。さらに、これらの他、例えば、車についても、輶輻なる名で、漢書、揚雄の長揚賦などに、それをうかがうことができる。

(3) ウラヂミルツォフ、前掲書、八七頁。

(4) ウラヂミルツォフ、前掲書、九三頁—九四頁。

(5) 拙稿「蒙古民族の社会経済史の一考察」前掲書、参照。

(6) 内田吟風「匈奴史研究」二四七頁。

(7) ウラヂミルツォフ前掲書、一一七頁。

(8) ウラヂミルツォフ、前掲書、一七〇頁。

(9) そこには封建社会が芽生えていたのである。(これについてはいずれ詳細に研究したい。)

(10) 五〇人と言う多数の職工をやとって生産したものもあった。(The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) pp. 177-178.)

五

かくの如く、元朝の成立期ころにおける蒙古民族の鉱工業が、みるべき発達をとげたのは、当時、彼等の需要が極めて大となったこと、また、その生産にあたって、他民族から多くの原材料を取り入れ¹⁾、他民族の進んだ技術を導入したことに よるが、もう一つ重要なことは、当時、彼等の家畜が増加したからである。

しかし、当時、彼等の家畜が増加し、家畜から得られるいろいろな加工生産が発達したと言うのであるならば、当時、自分たちに必要なものすら充分に得ることができない貧しい蒙古人

元朝の成立期ころにおける蒙古民族の鉱工業について

もいるのは、何故であらうか。

それは、当時、納税などにおいて、彼等の家畜や、家畜から得られるものを、彼等の領主たちに納めなければならなかったからであらう。ウラヂミルツォフは、当時、彼等の皇帝や首領たちが、彼等の財産から、欲しいだけ奪ったことについて記している²⁾。即ち、彼等の支配者の権力は、彼等に対して全く無限で、彼等の財産は勿論、彼等の身体をも恣に処分することができたのである³⁾。従って、当時、彼等に課せられた税は、時には彼等の剰餘生産物の一部と言ったなまやさしいものではなく、彼等の剰餘生産物は勿論のこと、彼等の必要生産物さえも納めなければならなかったのであらう。だから、税を納めなければならぬ彼等の中に、必要なものを充分に得ることができないものがあらわれるのに不思議はない。

では、そのように搾りあげる税は、何に必要であったのであろうか。その一部は、奢侈の風にながれる支配者たちが、西域の商人たちの運んでくる奢侈品などを買うために必要であった⁴⁾が、それ以外に、当時、大きな戦争必需品や日常必需品をつくるために必要であった。ことに、彼等が使った進んだ技術を

もった他民族たちに対しては、当時必要なものの生産をたかめる上に大切なものであったから、とくに優遇する必要があった。従って、使った他民族たちに支払うための費用は、多額にのほったに違いない。だから、一般の蒙古人たちからとりたてた税は、これらの費用にもあてて必要があった。

そうすると、当時、鉱工業生産を行うためには資金がいる。その資金は、一般の蒙古人たちからとりたてた税で賄われる。

従って、当時、龍大な戦争必需品や日常必要をつくればつくろほど、一般の蒙古人たちから、ますますきびしく税をとりたてて必要がある。ところが、当時、彼等の鉱工業生産は、非常に発達している。だから、当時、彼等に課せられた税は、極めて苛酷な重税であったことがわかる。

それは、納税しなければならない一般の蒙古人たちにとつて、たえ難いことであり、いわば、彼等に生活の窮乏を強要するようなことである。ところが、当時の彼等の支配者たちは、そんなことには一向頓着しないで、自分たちに多くの利を得ることができるとみれば、相次いで遠征や戦争を企図し、これを強行する。そうすれば、戦時用品などをつくる必要から、彼等

はますます苛酷な重税を負わされる。従って、当時、税を納めなければならぬ一般の蒙古人たちの生活は、ますます窮乏したことが推測できる。

だが、納税の義務を負わされた一般の蒙古人たちが、それで満足していたのではない。彼等も、やはり、貴族乃至は領主たちのように、日常生活に不自由のない生活を欲した。と言つて、他民族をやとつて生産するだけの資金も、また、加工原材料もない。しかしながら、たとえそれらのものを持たなくとも、とにかく支配的な地位につけば、資金も、加工原材料も、その他なんでも欲しいものを集めることができると言ふことを、彼等は知っていた。だから、彼等の中には、支配的な地位につこうとするものもあらわれた。そして、彼等同志の中で、たがいに争う事態が生じた。

こうみてくると、次第に発達する当時の鉱工業によって、支配的な地位にある貴族乃至は領主たちは、自分たちに多くの利をもたらし遠征や戦争などに必要な諸物資や、日常生活に必要な諸物資が豊富になる。ところが、一般の蒙古人たちは、この鉱工業の発達によって、次第に重税を課せられて生活は困窮す

る。従つて、貴族乃至は領主たちと、一般の蒙古人たちとの間に貧富の差が増大する。だから、そこに、一般の蒙古人たちの不満が生ずる。この彼等の不満と言うのは、当時の蒙古社会における内部的な矛盾のあらわれではなからうか。

尤も、鉱工業についての問題だけをとりえて、元朝の成立期ころにおける蒙古社会の内部的な矛盾が完全に考察できるものではない。当時の蒙古社会の内部的な矛盾を、完全にみきわめるためには、なお、他のものもろの部門について考察し、検討しなければならぬが、それは、今後の研究にゆずり、ここに、この小稿を結ぶ。

- (1) 例えば彼等は歐洲北東部の住民から金物を徴集した。

(*The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) pp. 137-138.*)

- (2) ウラヂミルソフ、前掲書、二六頁。

- (3) ドーソン、前掲書、六四頁。

- (4) 拙稿「蒙古民族の商業について」前掲書、参照。

- (5) ルブルクは、三〇〇〇マルクの金を職工たちに支払ったことを記している。(The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.) pp. 177-178.)

- (6) ウラヂミルソフ、前掲書、一六九頁。